

戯曲

動けば雷電の如く (二幕九場)

——高杉晋作と明治維新革命

原作／小田和生 改作／劇団はぐるま座創作集団
(二〇〇八年七月二五日)

登場人物

高杉 晋作	奇兵隊総督
森田	長州藩士
弥市	長州藩小者
来島又兵衛	遊撃軍総監
山県 小介	奇兵隊軍監
筑前	福岡藩浪士
坪井	長州藩士 (選鋒隊)

白石正一郎	回船問屋・小倉屋主人
竹蔵	小倉屋手代

真吉	農民
茂松	農民
甚平	農民
お常	農民
お芳	農民
老婆	
解説者	

小倉屋の手代・女中たち、農民たち、俗軍兵士など

【第一幕】

解説 これは今からおよそ一四〇年前、徳川幕藩体制を打倒して明治維新を成し遂げ、民族の独立を守りぬいた英雄たちの物語です。

舞台は、文久三年から翌元治元年、翌々年の慶応元年——つまり一八六三年から一八六五年にかけての長州藩のたたかい。この二年間に明治維新最大のドラマがあるのです。

およそ二六〇年つづいた徳川の時代。「百姓とゴマの油は搾れば搾るほど出るものなり」——血の出るような搾取のうえに成り立つ幕藩体制は、すっかり行き詰まっていました。その上に、欧米の資本主義列強が、アジアを次々と植民地にしていく。その勢いが中国を襲い、ついに日本にも迫ってきました。

嘉永六年、一八五三年、ペリー提督ひきいるアメリカの軍艦四隻が浦賀の港に侵入し、「開港するか、嫌なら一戦交えるか」と脅しつけました。「太平の眠りをさます上喜撰、たった四杯で夜も寝られず」——徳川幕府は飛び上がって、屈辱的な不平等条約を結びます。それによって、物価の高騰はとどまるどころを知らぬ勢い。「徳川の下では生きてはいけぬ」。庶民の怒りは沸騰することとなります。

文久三年、沸騰する攘夷熱に押されて、幕府は仕方なく「攘夷決行」、すなわち通商条約を破棄して、外国船を打ち払えと、諸藩に布告することになります。それを真っ先に行動に移したのが、攘夷決行の仕掛け人であった長州藩。海上交通要衝の地馬関、現在の下関で、海峡を通りかかったアメリカの商船ペンブローック号に大砲をぶっ放すのです。

砲声

解説 つづいてフランスの軍艦キャンシャン号を。さらにはオランダの軍艦メジャーサ号を。予期せぬ砲撃で、外国船は、みな、慌てふためいて逃げ去りました。

砲声にかぶせ、どっと起こる人々の歓声。

解説 ところがです！ 日ならずして、アメリカ、フランス両国の艦隊から、猛反撃をうけることとなります。

大砲の音。つづけて二、三発。解説はその間に、ライトと共に姿を消す。

第一場

文久三年六月。長州下関、前田砲台。アメリカ、フランス両艦隊に破壊された台場跡で、村の衆が忙しく立ち働いている。

真吉 えい、くそっ。異人の野郎どもっ、派手にぶっ壊しやがって。
甚平 何じゃ、あの化け物みたいな大砲は。こっちの大砲はまるで玩具じゃ。
お常 お陰でこちや、田圃も畑も台無しじゃが。
お芳 おらとこなんぞ、家まで焼かれてしもうてよう。
真吉 それにしても、だらしねえのが侍よ。総大将のお奉行様が、ええ？
茂松 進め進めちゆうて、そっくり返って采配振っちゃったが、馬の上からすってんコロリン。

一同、声をあげて笑うが、慌てて周囲を見回す。

真吉 お奉行様もだらしねえが、手下の侍どもがどうだ。デカイ面しちよったやつらが、異人の兵隊どもが上陸したとたん、さあ、逃げるわ逃げるわ。蜘蛛ン子のよう、蟹ン子のよう。
甚平 (真顔になって) わしら鉄砲撃ちにまかせて見ろっちゅうんじゃ。片っ端から仕留めてくれるわ。
茂松 ……わしら百姓がこねえに食えんようになったんは、徳川が開港してからぞ。村の若い者はみな、横浜に殴り込みをかけるかと真顔で話しとる。

竹蔵と弥市が登場する。

竹蔵 みなさん、ご苦労様でございます。小倉屋の旦那から、湯茶の振る舞いじゃ。さあさあ、一息ついてください。

竹蔵の声と共に小倉屋の手代や女中たちが登場する。百姓たち「さすが小倉屋さんじゃ」「有難い」などと言いながら、湯茶をうけとる。

竹蔵 うちの白石の旦那が言うておりますが、きょうび、こねえなにもかも物が高うなるのは、横浜の港を開いた徳川が、異国との貿易を独り占めしちよるからじゃと。
茂松 おお、それぞれっ。
竹蔵 (百姓衆に) 米の値段は、いちばん高いところでは三〇倍にも跳ね上がるとるそう。絹やら生糸は異人どもが買うていくから品薄になる。
真吉 なるほど。
竹蔵 お陰で、絹一〇〇反を一五両で買えよったのが、一六五両にも跳ね上がってしまいよる。京都じゃ、西陣の織物屋がばたばた倒れて……町衆は徳川を恨んで、尊王攘夷びいき、長州びいきで沸いとるそう。

旅姿の僧（高杉晋作）登場。立ち止まって海からくる風を懐にいれながら、あたりを見まわす。村人たちは話に夢中で気づかない。

弥市 輸入品にかかる関税も、自分たちで決めることが出来んという約束じゃ。横浜にできた居留地にはアメリカ人やエゲレス人がようけおるが、やつらが日本の娘を襲うたとしても……幕府の役人には、捕まえることも出来んそうじゃ。

茂松 それが、不平等条約っちゅうやつか？

弥市 横浜にはエゲレスの軍隊が二〇〇〇人あまり駐留するちゅうんで、五〇〇〇坪もある兵舎や弾薬庫を、幕府がカネを出してつくってやるというんじゃ。

お常 な、なんじゃと！ 百姓から搾り取った年貢でか。

竹蔵 うちの旦那らも、異国との貿易どころか、長崎や大坂との交易さえ自由に出来んのじゃけ、商人にとっても……（声をひそめて）徳川なんぞ迷惑そのもの。

弥市 江戸の将軍は、征夷大將軍じゃろう。それァつまり、異国が攻めてきたらこれを成敗するっちゅう意味じゃ。

お常 （耳をそばだてて聞いていた）へえ、そうじゃったんか？（と、ポンと膝を打って甚平に）じゃったらお前、役立たずちゅうことじゃなあか。

甚平 ただのコメ食い虫じゃないか。何が將軍さまじゃ。

一同、声をあげて笑い出す。

お芳 でもよ、こねえ百姓が食えんようになったんじゃ、どうにもならんぞ。

茂松 わしらァ、米をつくりよるのに、米の飯を食えるんは盆正月と、あとははあいよいよ、死ぬっちゅう時ぐらいよのう。

甚平 侍の子はどねえ意気地なしでも侍。わしら百姓に生まれついたばかりに、死ぬまで田圃にしばりつけられ、年貢しばり取られて牛馬同然……。

お芳 百姓は生かさず殺さず……一年入用の食いぶちだけ残して、あとはぜえんぶ年貢でとりあげられるっ。

真吉 不作にでもなったら、たちまち食えんようになって、村ぐるみで夜逃げしたり、年寄りァ姥捨て山、赤子が出来たら間引きをしよる。どこの村でも、田圃も畑も荒れて、わやになる。

お芳 じゃけえ、大名のお台所も火の車になって行きよるんじゃ。

真吉 それでまた年貢をようけ取り立てるけえ、ますます百姓がやれんようになっての。わしらハゼの実でも綿（わた）でも、自由につくれん。おまけに、お役人が無理やり安値で買い上げてよう……自分でつくったものを高い値段で買わされよるんど。アほらしゅうて、やれんわい！

弥市 （竹蔵に）わしら武家の奉公人も、藩財政窮乏というて、俸給はまともにもらえんのじゃ。傘張りの内職やら畑をつくらにや食うていけん。そのうえ商人に借金をして生きとる。——まあ長州じゃ、天保の一揆からこっち、門閥や家柄にかかわらず人材を

登用するようになってきてはおるがのう。わしも、お国のために役立ちとうて、うずうずしとる。同じ人の子に生まれながら、身分が違うというだけで終生うだつがあがらんようなことで、どねえなろうかつ。

甚平 難儀しよるんは百姓だけじゃのうて、みんな同じなんじゃのう。

茂松 (素朴に、ふと) のうのう、わしや前から不思議に思うちよったんじゃが。お大名の領地じゃというてもだぞ……百姓が田畑たがやさんなら、ただの荒地じゃろ？ たがやして田圃にしよるのは、わしらじゃろ？ なんでそれが、お殿さまのものなんじゃ？

お常 わしらア侍なんぞおらん方が、よっぽどいいんじゃがのう……。

真吉 ここまでくりや、百姓一揆ぐらいじゃだめぞ。わしらを苦しめよる大もとは、徳川じゃ。徳川を倒して世直しするんじゃったら、命をかけるがのう。

旅の僧が、とつぜん振り返って笑い出す。

お芳 あっ！（と、声をあげて真吉を制する）

晋作 ああ、すまんが、わしにも茶をくれんか？（と、座り込む）

お芳 は、はい……。

晋作 それにしても面白いのう。いやあ、実に面白い。

お常 (ぶっきらぼうに) いったい、何がでございますか、お坊さま？

晋作 そう、怒るな。いやア、気合いが入っとるのう！（茶を飲み干して）茶をもろうたお礼に、いま萩で台場をつくっとる女子衆の歌を一つ。

お常たち、顔を見合わせる。

晋作 (歌い、踊る) 男ならお槍かついでお中間となつて ついて行きたや下関 尊王攘夷と聞くからは 女ながらも武士の妻 まさかの時はしめだすき 神功皇后さんの雄々しき姿が 鑑 (かがみ) じゃないかいな。

茂松たち、歌に引き込まれて手拍子をはじめ。

茂松 そういう坊ンさんの方が、よっぽど面白いわ。

晋作 そうか？ それア良かった！

踊りながら去ってゆく晋作を見送りながら、一同爆笑。

真吉 ようし、仕事にかかるかッ。日暮れまでには、やりあげるぞ！

一同「おーッ」と氣勢をあげて、大砲を綱で引っ張る。音楽とともに溶暗。その暗くなった舞台の一隅、スポットの輪に照らされ解説者が立つ。

解説 外国軍艦に手ひどく破壊されたとはいえ、長州藩内の攘夷、世直しの意気はますます上がっていきます。ところが今度は、アメリカ、フランスに、イギリス、オランダを加えた四ヶ国連合の艦隊が、ふたたび仕返しに来るという長崎からの情報が、白石正一郎のもとに入ってくるのです。なぜそのような情報が白石のもとに入るのかというと、この白石正一郎という人は、下関の商人で、手広く海運業を営んでいました。また国を思う志の高い人で、全国の志士たちが白石家に入出入りしているのです。

(地図を指して) 山口県。かつての長州藩です。毛利の居城があった萩。藩庁のおかれた山口。小郡。長府。そして下関。当時馬関と呼ばれた下関は、北前船航路の要衝。北海道、東北、北陸、山陰の物産が日本海をとおって下関に入り、天下の台所である大坂に運ばれておりました。九州や四国との交易ルートでもあり、日本最大級の商業地、いわば資本主義の先進地です。これが高杉晋作の活動拠点となった根拠でもあります。

第二場

文久三年六月。長州下関、海峡の見える白石正一郎邸。海に面した浜門の木戸を開け、森田某、旅姿の僧（高杉晋作）とともに入ってくる。

晋作 いやァ、面白い。

森田 アメリカやフランスに二度と長州の土を踏ますなど、百姓・町人が沸き立っておる。

晋作 それに比べて、世禄の武士は話にならん。海の上の戦いで敗れたのは武器の差で仕方がないとしてもだっ。陸の上での戦いで、あのだらしなさはなんだ！

森田 上陸した異人どもの陸戦隊には、砲台を占領され、火薬庫を爆破され、民家まで焼き払われる醜態だ。だがの、わが光明寺の浪士隊は最後まで、よく戦うたぞ。クソの役にもたたんのは、家柄を鼻にかける総奉行配下の連中だ。

白石正一郎、奥より出て、森田に声をかける。

森田 (振り返り「おっ」と軽く顎でうなづいて、高杉に) 主(あるじ) どのだ。

正一郎 (左右を見回し) 高杉さんは——？

晋作 あたしです。

坊主笠をとる。正一郎、晋作のザンギリ頭を見て、一瞬、怪訝な表情。

正一郎 おお、お会いしたかった。白石正一郎です。

晋作 高杉です。東行、高杉晋作です。

森田 この男、昨日、お殿さまから突然、お召し出しがありましたな。

晋作 実は、このたび……（正一郎と対座して）馬関の再建と防衛の任を仰せつけられました。

弥市が舞台奥から庭先に現われ、森田の名を呼ぶ。

森田 （弥市の方に頷いて）では、わしは。

晋作 うん。

森田 （編笠を深くかぶると半ば独白のように）馬から落ちるような隊長に、馬関の防衛はまかせておけん。（喋りながら、弥市とともに舞台奥へ去る）

正一郎 わたくしも多分、そうなることと思ったりしました。高杉さんをおいてこの急場を収拾できる方は、ほかにございますまい。

晋作 いやいや、できることならいましばらく、萩でのんびりしていたかった。

正一郎 京都でご活躍されていたのに、突然萩の松本村に引きこもってしまったとか。

晋作 諸国から京都に集まった浪士たちのなかには悲憤こうがい、大言壮語して朝廷に出入りし、その実何かの餌にありつこうと、名を売っている輩が多い。——功名勤王です。諸大名に頼って倒幕をすとか、今度は天皇に頼って倒幕をするという、何の意味もない騒ぎです。幕府を倒すには、防長二州に割拠して、真の力を蓄えること。周布の親父にそういうたんですが、おまえのいうことは一〇年早いと。

正一郎 一〇年ですか。

晋作 じゃったら一〇年いとまごいをします。引き止められたら面倒なので、さっさと頭を丸めて、こういう姿になったのです。

正一郎 なるほど。うちでも行き交う諸国の志士をお世話しておりますが、飲み食いや騒ぐだけの方が多い。わたくしも同感です。……割拠ですか、それは面白い。

晋作 ……なんですか。小倉屋さんのほうへ入った情報では、四ヶ国が、長州に報復を考えているとか？

正一郎 もう耳に入りましたか。

晋作 やつらにしてみれば馬関の海峡を航行できんうえに、攘夷熱が高まったのでは黙っておれんでしょう。

正一郎 清国でアヘン戦争をやって、今度は日本。……大変な、大戦争ではないですか。

竹蔵が茶を運んでくる。晋作と目が合う。

竹蔵 お台場では、失礼いたしました。高杉さまとは存じませんで。

正一郎 (怪訝) ……。

晋作 (笑って) いやいや。

竹蔵 高杉さまが清国を訪れた時にお書きになった『遊清五録』、読ませていただきました。

晋作 (口元に微笑をうかべ、小さく頷く)

竹蔵 高杉さまは、いかに武器の上で外国に遅れているとしても、命をかけてたたかう精神を外国が一番恐れていると書いておられました、わたくしも！

正一郎 竹蔵。(下がるように目線で促す)

竹蔵 はい。

竹蔵、一礼を残し舞台奥へ。

正一郎 (晋作に向き直り) はい。高杉さんがおっしゃるとおり、ここは何としても外国の侵略から下関を、いえ日本を守らなければなりません。

晋作 そこで一策なのですが、まず天下に有志をつのって、ここに奇兵隊なる一隊を新たに創立しようと思うのです。

正一郎 (怪訝) 奇兵隊？

晋作 奇兵隊とは藩の正兵に対する奇兵です。——強力な西洋諸国の武力から国土を守るには、肉食の武士は役に立ちません。身分、地位、財産。そねえなものはこの際、どうでもよろしい。

正一郎 と——町人であろうと、百姓であろうとですか？

晋作 そうです。もっぱら実力を尊び、隊士は上下身分の差別なく、みな同格の付き合いをする。

正一郎 士農工商、身分を問わず……。

晋作 領内いたるところにつくるのです。志のあるものなら、百姓であろうと町人であろうと自由な武装を許すのです。

正一郎 下万民、すべてが自由に武器を持つ？ しかし、よくそのようなことをお殿さまが……。

晋作 外国の攻撃から国土を守るには、領民の総力を上げる他ないでしょう。だからお殿さまは、そうせいと……。 (微笑)

正一郎 ほう……。

晋作 庄屋や商人など、財のあるものは財を出し、鍛冶屋には鉄砲だろうが刀だろうが、武器をつくる自由を認める。領内五〇万の人民が武装すれば、どねえな相手でも打ち負かす力になるでしょう。

正一郎 なるほど……なかなか面白い。その奇兵隊、「人民安堵」を旗印に号令をかけなされば、百姓、町人が馳せ参じることでしょう。……ところで、高杉さんの攘夷の意味とは……？

晋作 攘夷には二種類があります。徳川は、もともとが外国嫌いの鎖国主義——外国の力に勝てぬとなれば、いともたやすく開港

し、やすやすと屈従する。それは清国と同じで、自分の地位を守ることが第一だからです。異人は立ち寄るなどというだけの攘夷は結局、世界の流れに踏みつぶされる。そうではなくて、外国への屈従は命をかけて断固拒否する、そして平等な立場で開国するという事です。それが真の攘夷であり、時代の流れでしょう。

正一郎 ほう……それは、われら商人の願いと同じこと。（波の音が聞こえてくる）

晋作 ぼくはこの目で上海を見てきましたが、上海ではエゲレス人やフランス人が街を歩くとシナ人はみな、こそこそと道をよけてゆきよる。シナ人は使用人のようだ。まるで植民地です。……しかもシナ人にとっては神聖この上ない孔子廟にですよ、エゲレスの兵隊どもが泥靴であがりこんで、鉄砲を枕にごろごろ寝転んでいた。清国の政府は、外国にたよって、自分の国の、太平天国の農民の鎮圧をはかりよる。これでは早晚、清国は滅亡する。日本をあねえな道にいかせるわけにはいきません。

正一郎 そのためには、どうすればよいと？

晋作 清国があのような有様になっているのは、外国の進んだ学問や文明を取り入れようとしないからです。徳川を倒して、時代遅れになった制度を改め、欧米諸国にひけをとらない四民平等の近代的な制度の国につくり変えることです。それで民族が独立できるということです。

正一郎 なるほど。（噛みしめるように）御一新！（しばし瞑想）馬関はもちろん、小郡から上関の方の商人、庄屋たちも、自由な商いが出来る世の中を願っております。……よろしゅうございます。白石正一郎、国のために身代をなげうって、高杉さんにかかけましょう！

晋作 協力してくれますか。

正一郎 はい。その奇兵隊、わたくしがまず入隊させていただきます！……なに、わたくし一人でも身内や出入りの者に声をかければ、百や二百の頭数は。とりあえず陣所には、この小倉屋を使ってください。（腕組みをして）それから、戦には資金がいりましよう。兵士を集めても食わさねばならず、武器も持たさねばなりません。藩の金ばかりあてにはできぬ……（考えて）はい、おまかせください。すぐに馬関の商人たちに呼びかけます。なあと、一両日中にもこの庭が、千両箱の山となるでしょう。

晋作 なんと……一挙にめどがたちました。百万の味方を得たようです。高杉、心から礼をいいます。（立つ）

正一郎 わたくしも、高杉さんと共に国の夜明けを見る楽しみが出来ました。

晋作 （感極まって）白石さん、やりましょう！

晋作と正一郎が握手をかわす。音楽たかまり、暗転。
解説者がスポットに浮かぶ。

解説 文久三年六月、土農工商の身分を越えた奇兵隊が結成されると、それにつづいて農民の隊、漁民の隊、商人の隊、あるいは狩人の隊や女性だけの隊、また医者や神主、僧侶などで編成された隊——さまざまな人民諸隊が領内各地に生まれていくのです。その数は、ざっと一五〇を超えていた。

七月には薩英戦争が起こります。生麦村で大名行列を横切ったイギリス人を斬り殺した報復です。鹿児島町の大半が焼き払われますが、薩摩側もよくたたかい、イギリス側も大きな被害を受けました。攘夷熱はいよいよ全国でわき上がり、京都の志士たちの中では、天皇を担いで倒幕戦争へすすめという動きまで出てきます。

ところがここで情勢が急展開します。京都で派手に振る舞っていた長州藩をはじめとする尊皇攘夷派が、彼らがあてにしていた天皇自身によって、「国賊」の汚名を着せられ、七人の尊皇急進派の公卿たちとともに、京都から追放されるのです。……世にいう堺町門の変、七卿落ちがこれです。——徳川幕府と薩摩、土佐などの公武合体派、そして天皇が、封建体制護持で力を結集して、尊讓派つぶしに乗り出したのです。京都の町では、新撰組が尊讓の志士たちを見つけてはテロを加える。京都にいた諸国の浪士たちは長州に逃れてくる。

ここにいたって、尊皇攘夷運動は二つに割れて、新しい力が登場していきます。京都に兵をすすめて天皇を取り戻し、元の地位を取り戻そうという流れ。そして、それに反対する高杉晋作！

第三場

元治元年一月。周防宮市、遊撃軍陣屋の番所。隊士の身寄りらしい老婆が面会をもとめて、検問役の隊士二人（甚平、茂松）と話し合っている。他に隊士二人（竹蔵と真吉）共に番所の床机に腰かけ、休んでいる。陣屋の内側から「小隊前へ進め」「並足進め」「小隊止まれ」「右向き回れ」など、訓練の声が聞こえる。

老婆 よい、兄さまよい。近ちか、京の都で……戦が始まるっちゅうのは、まことか？

甚平 うるさいのう。卯之吉はいま、訓練中じゃと言うとろうがっ。

茂松 （優しく）ほれ、むこうの松の木陰に地藏堂があろう。あすこの縁先にでも腰かけて待っとりなされ。ほれほれ。

茂松、老婆をいたわるように連れていく。

甚平 きょうはこれで、何人目じゃ。こういう噂は、早いのう。（空いた床机に腰かける）

真吉 おい甚平、もちっと丁寧な口の利き方せんか。威張っちゃいけんと隊の規則はなっとうが。町人を横着なというて斬り殺した隊員が、即刻首をはねられたろうが。いばとつたら、いまにあねえなことになるど。

甚平 お、脅かすなっちや。わかった、わかった。

茂松 戦か、うずうずするのう。徳川倒して世直しじゃけえのっ。高杉さまが、この農兵刀を考案して、百姓も刀を持っていいと言った。そして奇兵隊の呼びかけをしたから、村中が沸き立ったもんなア。長男は年貢おさめにやならんというて、わしら次男、三男の出番じゃと、はせ参じたんじゃからな。

真吉 うちの爺さまがいうとつた。天保の一揆はすごかったが、今度はそれどころでない大仕事ぞ。相手は徳川、鉄砲かついで世直しじゃ。人は一度は死ぬ命じゃが、自分の欲だけで死ぬのはむなし。世のため人のために死ぬなら本望ぞ。しっかり性根据えてやってこいと。

甚平 隣の婆さまもひどうなっている。太閤様も百姓のせがれ、天下の大もとは百姓なんど。侍どもは百姓が食わせてやっつる。じゃが人を食わせとる百姓様は、先祖代々牛馬同然。この村でも凶作のたんびに、どれだけのものが飢え死にしたか、可愛い赤子はどれだけ間引きされたか。働くもんが食うていけん世の中があるかつ。ご先祖様が難儀した分まで頑張っつてこいっちゅう

て。

そこへ、お常とお芳、それに先刻の老婆がやってくる。

お常 (近づきながら) おーい。おまえらしっかりやっとなるか。

甚平 おっ。なんできたんじゃ。

お常 なんでちゅうことがあるか。……京の都で戦が始まるっちゅうけえ。村の衆からいろいろことづけられたんでな。(風呂敷包みを解きにかかる)

竹蔵 たしか前田のお台場で一緒だった……。

甚平 ああ、おらとこの姉さまと、真吉っあんこの、おふくろ様じゃ。

お常 (風呂敷包みから品物を取り出すと、真吉に) ほりゃ、これが下着。……こりゃ、六尺。……まさかのときに、笑いもんにならんように……。

お芳 (風呂敷から取り出した包みを甚平に渡す) ぼた餅じゃ。……わしらあ、正月の餅もつけなん だが、村の衆が持ち寄ってくれたお陰でよう。……拝んで食わにゃ罰が当たると。みんなと一緒に食うんど、命をあずけた仲間じゃけえな。

真吉 そいで田んぼは、ちゃんとやっとなるんか。

お常 倅(せがれ)が奇兵隊にいったるんじゃからと、庄屋さんも村の衆もよくしてくれよる。心配するこたアない。

老婆 (茂松に) そんならついでに、わしのも頼みます。婆々が夜っぴで縫うた袷の着物じゃ。小郡勘場打廻手子、卯三郎の倅、卯之吉。

茂松 (受け取って) うム、たしかに。

このとき、坪井と呼ばれる長州藩士が、肩を怒らせてやって来る。

坪井 どけどけい。

お常 (突き飛ばされて) なにをしなさる。

真吉 いまは誰も通すなどの命令であります。

坪井 それがどうした。毛利家譜代の臣、坪井棕之進じゃ。(入ろうとする)

真吉 偉いお侍さんというても、蟻ン子一匹通すなどというのが、高杉様の命令であります。

坪井 (にやり笑って) その高杉がつくった奇兵隊を、解散せよと談判にきたのじゃ。

甚平 はあ？

坪井 奇兵隊や遊撃隊の下郎どもに先陣を切られては、世禄恩顧の臣の恥辱のみならず、わが藩は天下の笑いものじゃ。どかぬかっ。(刀の柄に手をやると、唸るように) この野郎ども——。(まわりを睨みまわす)

お常 (隊士たちに) お前方——。
坪井 上下の弁えも心得ぬ土百姓どもめが。
竹蔵 われら尊攘の大義に生きるものに、上下の差はないと教えられておるんですが。
坪井 尊攘の大義だと? (蔑って) 武道の本意も弁えぬ土百姓が、口にする言葉か。
茂松 質問であります、武道の本意とはいったいなんですか。
坪井 頭が高い! 下郎どもが日銭めあてで、腰に段平(だんびら)さげて、ひと働きして侍の扶持にでもありつこうかといった魂胆じゃろうが。貴様らのようなゴロツキに、武道の本意など、聞かせてやるのも汚らわしいわ!
真吉 われら奇兵隊の武道の本意は、こう習っておるんです。
甚平 強き百万の兵といえども恐れず、
茂松 弱き民は一人といえども恐れ候事!
坪井 ええいつ。利いた風な口をきくな。高杉の馬鹿野郎、こんなやつらをのさばらせやがって。
真吉 われら奇兵隊、隊の命令は守らんわけにはいかんのであります。
坪井 (歯ぎしりせんばかり) どうでも通さんというのか。(鯉口きって身構える)

睨み合い。

お常 (歌いだす) ……奇兵隊とて見下げてくれな……。

坪井が女たちの方を振り返る。思わず老婆が飛び出してくる。

老婆 奇兵隊とて、見下げてくれな、もとの天下も根は百姓。
お常・お芳 (老婆とともに) こんにやく武士に骨がない。切られて煮られて弁当の菜!
坪井 (逆上) このうっ。(抜刀)
甚平 動くなっ。こちゃ、熊でも猪(しし)でも百発百中の鉄砲撃ちじゃ。刀をおさめんと、その眉間、吹っ飛ぶぞっ!(堂々と銃を構える)
坪井 ま、待て。慌てるなっ。慌てるでないぞ。(慌てて退散)

——暗転。

第四場

時、前景に同じ。遊撃軍、陣屋内の一室。晋作が、来島又兵衛を説得にきている。筑前、森田、弥市らが同席している。

筑前 だから、今なんですよ来島先生！ 今こそ、われら尊攘派の汚名返上の時なんです。阿波、因州、筑前、対馬などの諸藩は、明らかに長州藩に同情しよとです。京、大坂の民百姓も、長州びいきで沸きに湧いとる。じゃけえ、兵を貸してほしいと。

来島 おう……。

晋作 (来島に) そりゃ絶対にいけん。

森田 (晋作に) みんなは沸き立っておるといのに、お主と周布さんだけがなして反対するんか。

筑前 そうたい。いまわれらが京の町へ攻め上れば、朝廷内では動揺がはじまり、諸藩もかならず立ち上がる。この勢いで、幕府を倒すことも可能なのじゃ。来島先生、お願いします。

来島 わかっておる。(晋作に) 誰がなんと言おうと、わしは行く！

晋作 これは殿の御命令なんですよ。

来島 ああ、たとえ殿の御命令でもだっ。……軽率に外国船を打ち払えと布告したのは江戸の將軍ではないか。こちらは幕府の命令に従ってやったまで。いまさら長州の暴挙などと言われるおぼえはない。孝明天皇をたぶらかしちよる薩摩や会津の奸賊を討ち、殿の無実の罪を晴らさんでどうするんかい！

晋作 来島さんの無念は、ぼくにもようわかります。しかし、殿さまの嘆願書をもって京へのぼった久坂らも、伏見まで行って立ち往生しとるじゃないですか。

森田 桂さんや久坂らが京、大坂を駆け回って苦労しとるからこそ、新撰組を叩きつぶさんといかん。朝廷をこちらの側にとり戻さんことには、尊皇攘夷の大義が成り立たんじゃろうがっ。

筑前 じゃけえ、兵を連れておしかけるといっておるんじゃ！ 七卿も都に帰りがたっておられる。わしらもいつまでも長州に居候しとるわけにもいかん。

晋作 なにを寝言を。

筑前 寝言だ？

晋作 (懐から紙を出して) 孝明天皇はこねえ言うちよる。……都落ちした御公家衆は、(読む) 「鄙野(ひや)の匹夫の暴説を信用した」、つまり、いなかびて品のない、身分のいやしい男たちの言うたことを信用したっ。

来島 (真っ赤になって) ば、ばかをぬかすなッ。誰が匹夫じゃ！

晋作 しかも……「長府宰相の暴臣」、つまりぼくらのことです。「その主を愚弄し、理由もなく外国船を砲撃した。かくの如き凶暴の輩、必ず罰せざるべからず」と。

来島 ううっ……。 (歯ぎしりせんばかり、拳を膝に叩きつける)

晋作 天皇は、攘夷も嫌、討幕も嫌と言うと。われわれを「朕の命をちぢめる憎つくき奸賊」と腹を立てとるんです。

筑前 じゃから兵を連れて。

晋作 薩摩の島津公を頼って兵を挙げようと、寺田屋に集まった志士団は島津久光に殺された。土佐の武市瑞山は、山内公を頼って兵を挙げようとして、山内容堂にとらえられた。攘夷派大名に幻想を持って挫折し、今度は天皇に頼って倒幕などと夢想した。——悲憤こうがい、大言壮語の根無し草……自分の力はなにもなく、人のふんどしで相撲を取って、それで幕府を倒すだと？ そねえなことだから、京都から追い払われたっ。そういうことじゃないか？

筑前 なんだとッ。

晋作 (来島に) 自分の都合がいいように情勢を描き、勇ましそうに振る舞うが、公卿どもに取り入って、派手にたちまわっていた昔が懐かしいだけじゃろう。

筑前 (天井に向かって高笑いしたかと思うと、いきなり刀をとり) このう！ (と、こじりで床をたたく)

晋作 (不快げに、ふ、と鼻であしらい) 来島さんまでが、こねえな空理・空論の輩の扇動に乗せられて……。 (筑前に) 貴様の腕で、俺が斬れるかっ！ (と大声一喝) 上っ調子なウワの割拠、上っ調子なウワの発進は聞くだけで、肝が煮ゆるわっ。……徳川幕府を倒すというのは簡単なことではないぞ。当てにならぬ大名や天皇に幻想を持つのではなく、自分たち自身の力に頼ること、すなわち奇兵隊をはじめとする諸隊の力に頼ることだ。そして民百姓と一緒に戦ってはじめて、幕府の強大な権力を打ち負かすことができるのだ。防長二州に割拠して、幕府軍を迎え撃つ。民百姓から離れて、京の都へ飛んでゆくようなことをしたら、長年の同志の苦労が水の泡になりかねんのだ。

来島 (茶化すように) それがお主の、割拠論ちゅうやつか？

晋作 そうです。(森田に) どうだ森田、お主はそうは思わんか？

森田 そりゃ確かに、奇兵隊に入ってきた百姓ども、えらい頑張ってはおるがのう……。

来島 頑張っておらんとはいちやらん。

晋作 彼らは徳川を倒すため、命をかけた。そのために長州全土から集まってきとるんです。

森田 しかし、同志のことを思うと俺もなあ。

来島 もうよいつ！ 聞く耳もたぬわ。(皮肉に) 新知百六〇石が奥歯にはさまっちゃるんじゃろう。

晋作 (目が光る)

筑前 うぬこそ口舌の末に頼って戦を避ける、卑怯者じゃ。

晋作 (ぐっと堪える) ……。

来島 めんどろじゃっ。わしが山口へ行って、直接、殿のご評決を仰ぐわ！ (荒々しく席を蹴って行きかける)

晋作 (引きとめて) お待ちなさい。……来島さんがどうしても思い止まってくださいさんのじゃったら、ぼくにも考えがあります。

来島 じゃったら、どねえすと言うのじゃ。

晋作 (毅然) いまから、京へ行きます。

一同、「えっ」「京へ？」驚きの声。来島だけせせら笑い。

晋作 (前の科白につづけて) 山口へ戻らず、このまま京へ走ります。

森田 殿の許しも乞わずにか？

晋作 そうだ。

弥市 それでは脱藩ではないですか。

森田 お主、脱藩の罪を知っとろうが。

晋作 もちろん。

森田 間違えれば、これだぞっ。(腹を切る仕種) 首が飛ぶでよ。

弥市 (心配して) 高杉さま……。

晋作 ぼくの命とひきかえに、待ってもらえませんか。ぼくが上京して久坂たちに会い、京へ攻め上げるべきではないと意見がまとまれば、その時は発進をやめてもらえんですか。

一同、固唾をのむ。

来島 (ゆっくりと) よかろう。

筑前 え？(意外な表情)

来島 待ってやろう。

筑前 しかし。

来島 行かせてやれ。男が命をかけるというちよるのじゃ。(晋作に) 二言はないの。

晋作 ありません。

森田 (救われたように) よし。話が決まれば酒じゃ酒じゃ。席を替えて飲もうではないか。飲もう飲もう。

森田を先頭に、一同、部屋を出る。そこへ「高杉さん」の声といっしょに、竹蔵が小急ぎに姿を現わす。

竹蔵 白石の旦那の使いの者が。——来島さまとのお話し合いはどうなったかと。

晋作 来島さんはなんとか押さえた。あとは久坂たちをどう説得するかだ。いまから上方へ向う。

竹蔵 いまから？ ですが、お殿さまのお許しもなく、そのようなことをされては……。

晋作 なぁに、人生のことは棺に蓋をするまでわかりやせん。船はないか？

竹蔵 ……あります。今夜、富海から出る、小倉屋の船があります。

晋作 それならすぐ、出立の手配をしてくれ。

竹蔵 承知しました。

晋作が竹蔵を振り返り、微笑みを浮かべたところで——幕。

【第二幕】

第一場

暗黒の舞台に、しばらくは寒風のみ。やがて、二筋の光の輪の中に、森田と弥市の姿が浮かび出る。

森田 なんと、かけがえのない多くの同志を失うてしもうたことか……。

弥市 来島又兵衛、久坂玄瑞、入江九一……。

森田 高杉が脱藩して京へ向かったのが、元治元年、一月二八日。大坂で久坂らに会い、久坂らとともに帰国したのが三月の末であつたか……。

弥市 高杉さんとともに帰ってきた久坂さんから、やはりいまはその時期ではないと説得され、一時は京への出兵を思いとどまつた。

森田 だが高杉は、帰国と同時に脱藩の罪で野山獄につながれ……だれも止めるものがいなくなった。

弥市 六月五日夜——。京都三条の池田屋で、密談中の吉田稔麿など同志多数が、新撰組に襲撃され、殺害される事件が起こつた。

森田 これが暴発のきっかけとなつた。いまこそ決戦のとき！

遠く、闇に軍馬のいななき。馬蹄の音。

弥市 来島又兵衛を領袖とする遊撃軍が、京へむけて進発したのが六月一五日。続いて、家老福原越後、久坂玄瑞、久留米藩の真木和泉ひきいる諸隊が次々と京へ向かつた。

森田 （血を吐くように）われらが兵をひきいて攻め上れば、公卿も大名もたやすくわが長州になびくものと、信じて疑わなかつた、われらが誤算つ……！

軍勢の関（とき）の声。くわえて大砲の音、二、三発。

弥市 七月一九日。夜明け前に開始された戦闘は、夜が明けた頃には、早くも勝負が決まっていた。
森田 世に、禁門の変という。

銃声と軍馬の嘶き。暗闇のなかに深手を負った来島が浮かび上がり、槍を構える。

来島 この首、とるか、とらるるかっ。

銃弾数発を受け、その場にどっと倒れる。

弥市 高杉さんが……言うたとおりの結末じゃったッ。

雷鳴、豪雨の音とともに、いったん二人の姿は消える。緊迫した音楽とともに、解説者が浮かぶ。

解説 最大の勤皇派であった長州藩は朝敵、すなわち天皇の敵という烙印が押された。そして孝明天皇は、徳川幕府に長州討伐を命令した。機を同じくして、海からはアメリカ、イギリス、フランス、オランダ、四ヶ国連合艦隊が、一七隻の軍艦と五〇〇〇人の大軍で下関に襲いかかった！ 藩政府は俗論派が台頭し、正義派の攻撃をはじめた。まさに、長州存亡の危機！ 否、維新倒幕運動壊滅の危機。だがここから、長州藩が朝敵という烙印を押されてから、明治維新革命はまさに本格的な展開をはじめることとなるのです。

連合艦隊の砲撃音が連続する。長州軍の関の声と共に真吉、竹蔵、甚平、茂松が舞台奥に浮かぶ。

真吉 けっ、徳川と異人どもがグルなって、長州を叩きつぶそうって魂胆かッ。
甚平 （砲声の方を睨みつけて）かかって来やがれ、わしらが相手になってやる！

甚平が銃を構えてぶっ放すと、抜刀した真吉たちが関の声をあげて前面に出る。

竹蔵 連合軍は二、三〇〇〇発もの艦砲を、見境もなく撃ちこんできやがった。

連合艦隊の凄まじい砲撃、銃撃の音。隊士たち一瞬、地面に身を伏せるが、茂松、甚平を先頭にひるまず立ち上がる。

茂松 わしら奇兵隊をはじめとする人民諸隊は、六度に渡って敵軍の上陸部隊を押し返した！
甚平 誰もがみな、捨て身でかかった。

このとき甚平が銃弾をうけて倒れ、茂松と真吉が「甚平！」と叫んで駆け寄る。甚平は茂松に支えられて気丈に立ち上がり、さらに前進の構えをみせる。

森田 三日間の戦闘で、四ヶ国連合軍が出した損害は、戦死者一二名、負傷者六六名。
弥市 これに対する長州側の犠牲者は、戦死者一八名、負傷者二九名。
竹蔵 装備の上では大きな開きがあったが、わしら陸上戦じゃ、ほぼ互角に戦った。
真吉 死傷者のほとんどが奇兵隊と膺懲隊、みんなわしらの同志だった。
茂松 砲台を占領した異人どもは、はじめ下関の街まで攻め込む構えじゃった。
甚平 それを踏み止まって迎え撃ったのも、われら奇兵隊！
茂松 どねえな武器を持ってこようと、接近戦になったらこっちのもんじゃ！
竹蔵 こっちの軍艦や砲台はつぶされ、敗戦は敗戦だが、意気は示したっ。

音楽。

森田 このとき連合軍は、賠償金として三〇〇万ドル、一八〇万両を支払え、また馬関の港に浮かぶ彦島を、イギリスに割譲せよと要求した。

茂松 藩政府には、この講和談判の矢面に立つものが、おらんかった。

甚平 それでわれらが大將・高杉さんが、萩の座敷牢から引っ張り出されたというわけじゃ。

森田 元治元年八月——。藩から全権を委任された高杉は、長州藩筆頭家老・宍戸刑馬の名を名乗り、敵艦隊の旗艦ユーリアラス号に乗り込んだ。敗戦した側だというのに、イギリス人に「魔王のようだ」と言わせたほどの、ごう然たる態度だった。

萌黄色に薄青色の桐の大紋を染めいぬいた礼装用の直垂（ひたたれ）、黒い烏帽子をつけた晋作が浮かび上がる。息を呑むようにして、隊士たちが注目するなかで——。

晋作 馬関の港に入る外国船に食料や飲み水を提供したり、シケの時は避難の船員を上陸させる。それは認める。しかし、三〇〇万ドルの賠償金をわが藩が出す筋合いはない。そもそも外国船の打ち払いは幕府の命令である。徳川幕府に要求するのが筋ではないか。——いま一つ、エゲレスに彦島を割譲すること断固、拒否する！（にやり、微笑）砲台の五つや六つを壊されたぐらいでは、戦争に負けたとは言えぬ。——（毅然と）わが長州藩では、防長二州の五〇万、すべての領民が武装して、一人残らず死ぬまで戦う覚悟をもっておる。どれだけ新鋭兵器を持っていようが、そちらの陸戦兵力はわずか二千か三千に過ぎぬではないか。（不敵な微笑）本気で戦争の勝敗を決したいというのなら、来られるがよかるう。

茂松たちの明かりが強まる。

茂松 高杉さまがつめよると、異人どもの総大將が、

甚平 青い目ン玉ひんむいて驚いたッ！

茂松 賠償金も彦島割譲もあきらめた。

茂松たちの笑いと共に、晋作の姿が消える。

森田 だが、喜ぶ暇はまるでなかった。

竹蔵 高杉さんは開港派になり下がったと、攘夷派からも命を狙われた。

真吉 そしていよいよ、全国三六藩、十数万の長州征伐軍が、広島にまで迫って来やがった！

茂松、森田たちの姿が消え、解説者が浮かぶ。

解説 長州藩内では逆流の嵐が吹き荒れます。ひたすら幕府に謝罪することで許しを請おうという俗論派が藩政府の実権をにぎり、

九月二五日、井上聞多が、俗論派の刺客に襲われ瀕死の重傷。また同自決に追い込まれた。そして京都出兵の責任を問うて福原越後、国司信濃隊をはじめとする諸隊に解散命令を出し、長州正義派の壊滅をはかるの、とうとうたる敗北主義の逆流が流れるなか、高杉晋作がとった行

日に、正義派を率いてきた政務役・周布政之助が、益田弾正の三家老を謹慎させ、ついに奇兵です。まさに幕末維新革命運動の最大の危機。こは——彼の全行動のなかの圧巻となります。

第二場

元治元年一〇月下旬。長州、萩郊外。高杉の隠れ家。激しい嵐が吹きすさぶ夜。百姓姿の晋作が、蠟燭（ろうそく）の明かりで手紙を書いている。息を切らせて走ってきた弥市が戸を叩き、声をひそめて晋作をよぶ。

晋作 （蠟燭を吹き消して）誰か？

弥市 ……わたしです。

晋作 （戸を開けて）おう、ご苦労……上がれ。

弥市 はいッ。

晋作、ふたたび蠟燭をともし。弥市は、周囲を警戒しながら戸を閉めると、雨に濡れた蓑笠を脱ぐ。

弥市 ……やはり俗論党は、高杉さんを狙っています。暗殺団が探し回っているそうです。

晋作 そうか、もはや一刻の猶予もないのう。（手早く手紙を書き上げ、弥市に手ぬぐいを出してやり）諸隊の様子は、どうだ。

弥市 なにがあらうと、諸隊の解散だけは絶対ゆずれん！ これ以上、俗論一派をのさばらせちゃおけんと、真吉や茂松をはじめ、隊士たちはみな、昨夜も遅くまで激論を交わしていました。しかし、幹部連中が……。

晋作 元気がないか？

弥市 解散せずに守りぬくとはなっています。しかし……諸隊を温存するために嘆願書を出すのはよしとしても、俗論政府打倒などは、はね上がりの暴挙じゃという人も。

晋作 （半ば独白）いったん逆流が流れだすと、苦労を共にしてきた連中までが、敗北主義の流れに、押し流されていきよる。

弥市 しかし、山口・小郡の周辺では百姓・町人衆はみな、腹をたてていました。諸隊を解散させ、無条件降伏をする俗論政府を捨ておくわけにはいかぬと。

晋作 そうか。（穏やかに）馬関の漁師が言うとうった……うわべの潮の流れと、海の中の潮の流れはまるで違う。まったく逆の流れをしとることもある。うわべだけでなく、海の中の流れをつかまんと漁にはならんのじゃと。

弥市 なるほど……。

晋作 幕府は俗論派を使って、われら正義派・諸隊を壊滅しようとしておる。俗論派はわが身を守るために人を斬る。今こそこの俗論政府を倒さねばならん。力に対しては、力で倒す。

弥市 はい！

晋作 諸隊の力を信じて……防長五〇万領民の力に頼って、萩城めがけて攻め上らねばならぬ！

弥市 （晋作を見つめて）萩城へむけて兵を進める……それでは逆賊に。お父上まで。

晋作 ああ。そこがつらいところだ。わしの命はともかく、わしの家が逆賊となる。親戚にも類が及ぶかも知れん。勝ったとしても、俗論派・門閥が死ぬことになり、わが家は恨みを買うことになる。

弥市 井上さんを襲ったのは、井上さんの従兄弟だったとか。

晋作 家を守るため、仲の良かった親戚同士が戦うことになる。

晋作、ゆっくりと立ち上がり、夜空を見つめる。いつの間にか雨が上がり、満天の星が瞬いている。

晋作 これまで父上にはさんざん心配をかけてきた。隠れて松下村塾に通って肝を焼かせた……江戸でも松陰先生と行動を共にして、たいそう心配かけた。上海へ行く時や、長崎の丸山でカネを使い果たした。

弥市 ふっ。（と笑う）

晋作 上海から帰ったら、勝手に軍艦を買うたといってしぼられた。イギリス公使館の焼き打ちをやり、京都出兵の時には脱藩して野山獄につながれた。人はわしのことを離れ牛というとる。……まじめ一途で、藩公にお仕えして家を守ってきた父上には……生きた心地がしない思いをさせてきた。（万感、胸に迫る）

弥市 高杉さん……！

晋作 君主に忠、親に孝、家を守るのがこの世の中の定めだ。じゃがのう！ 時代はそれではおさまらんのだ。その狭い枠をのり越えなければ、日本国が滅びる。みじめな民族になってしまうではないか。ここは、国のため、民族のために立たねばならぬ。親を捨て、子を捨て、みずから不忠不孝の人となり、国政をして維新たらしめんと欲す！ ……いまや古い世界に後戻りは出来ん。維新あるのみじゃ。

弥市 わたしも一緒に。

晋作 （微笑）うんッ。

いつの間にか空が次第に白みはじめる。

晋作 （一点凝視）生きて大業の見込みあらば、いつでも生くべし、死して不朽の見込みあらば、いつでも死ぬべし。——これは松陰先生が、江戸の伝馬の獄舎から、ぼくに下さった最後のお言葉だ。松陰先生は天下国家とかかわって、どう生きるかを教えてくれた。先生は真実のため、進歩のためには、どねえな権威もおそれず行動した。真（まこと）の学者だ。……この乱世を打開するものは公卿でも大名でもない。たのむはただ草莽のみ。草莽——すなわち、在野の志ある人々。（弥市を見すえて）野にあって志を同じゅうするもの同士が集まって、共に決起するより他に手だてはない。恐れながら天朝も幕府も、わが藩もいらぬ！ ……松陰先生や久坂玄瑞、吉田稔麿をはじめ、同志たちの犠牲を無駄にするわけにはいかんのだ。

弥市 はいっ。
晋作 (弥市に) すまんが、この手紙を持って湯田の吉富藤兵衛さんのところへ走ってくれ。決起するゆえカネを頼むという書状だ。わしはこの足で山口へ走る。
弥市 わかりました！

俗論の刺客(坪井棕之進)とその手下が現われ、表戸を激しく叩く。

坪井 誰かつ、誰かおらぬか！ 御用改めじゃ。幕府征長総督の命により、人を捜しておる。戸をあけいっ。

坪井たち、抜刀して中に踏み込む。晋作は薄汚れた手ぬぐいで素早く頬被りをする。

坪井 (覗きこんで) なんじゃ、土百姓か……。くそつたれ、ここにもおらんか……。いったいどこに！

坪井、手下を促し、憤然と去る。

弥市 それでは、お気をつけて！

晋作 お主もなっ。

弥市 はい。(小走りに去る)

晋作、弥市を見送って歩きはじめ、燃えるような朝焼けを見上げて足をとめる。

晋作 (厳しい表情で低く詩を吟じはじめる) 内憂外患我が洲に迫る 正に是れ邦家存亡の秋 将に回天回運の策を立てんとす 親を捨て子を捨つる亦何ぞ悲しまん……。

朝焼けのなかに一瞬、晋作のシルエットを残して、暗転。

第三場

元治元年一二月。長府、遊撃隊陣所。火の気のない一室。深夜。

森田 (半ば独白) 諸隊解散命令の後、益田弾正ら三家老が自害、佐久間佐兵衛ら四人の参謀も野山獄で首を切られ、前田孫右衛門

ら七人の政務員も野山獄にとらわれ首を斬られる。中山忠光公も田耕村で暗殺された。次から次へと正義派が殺されていく。

筑前 赤根からは、まだ何の報せも入らんとか？

森田 ああ。俗論政府と正義派の間を取り持とうと、飛び回るとるようじゃが、どうかのう。

筑前 ここはどうでん、赤根に頑張ってもらいより他に道はなかつ。しかし、京都進発のとき、あれほど止めた高杉が、今度はみんなが無謀じゃというのに、一人だけ俗論打倒を主張しよる。わしには狂うとるとしか思えん。

この時、人声。

森田 お？ 高杉だ……山県の声も。

晋作が、声高に喋りながら、山県と一緒に入って来る。

晋作 山県、お主や、赤根に騙されとる！ なにが俗論政府と妥協か。（森田たちを見て）お主らもいたか、ちょうどいい。（振り返り、廊下の奥に向かって）遠慮はいらん。隊員はみな、同格じゃ。

真吉、竹蔵、茂松、甚平ら、つづいて登場。それぞれ場所を選んで、座る。

山県 かしですnee。

晋作 なんだ。

山県 征長軍は広島にあつて、まだ軍を解いてはおらんのです。いま長州が内乱を起こせば。やはり……これは、幕府につけこむ隙を与えることになるのではないのでしょうか？

筑前 現にわしらは京の戦で惨敗しとる。たとえ俗論党を打ち負かしたとしたっちゃ、京都の戦どころでない十数万もの幕軍を迎えてだな。

晋作 幕府の大軍に取り囲まれて、とてもではないが勝ち目はないというのだな。

森田 今は、諸隊解散令を無視しておるが、藩からの金は止められ、兵士たちに食わせるのも難しい。いつまで無視しつづけられるか……。

晋作 なにっ？

森田 ……もともと殿さまが、諸隊結成を許したんは、外国と総力で戦わにやいけんちゅう建前があつたからじゃ。じゃが講和が片がつき、朝敵の賊名を着せられた今となつては、攘夷も尊王も、大義名分はなくなつてしもうとるしなあ。

晋作 良いことじゃないか。

森田 え……？

晋作 世の中は建前でなり立つるのではない。幕府を倒すのは、実際の力だ。すなわち、われら諸隊と人民の力をたよりにやるっちゅうことっ。それがいよいよはっきりしたんじゃ。あれこれ理由を並べて決起に躊躇するのは、赤根の妥協論に惑わされているからだ。俗論派は幕府の側に立って、正義派を根絶やしにしようとしているのではないか。この藩内の獅子身中の虫、俗論派をたおし、藩論を統一することが、幕府を迎え撃つ力になるのだ。領内の百姓、町人が固唾を呑んでわれらが行動を見守っているのがわからんかつ。

山県 しかし赤根総督も言うように……たとえ君側の奸を除くためとはいえ、いま萩へ向かって兵を進めることは、殿様に弓を引くことにもなりましょうし——。

晋作 馬鹿ぬかせ！（激怒して）赤根のごとき成り上がりになんか何がわかるかつ。おれは毛利家譜代の臣、高杉晋作だ。このまま俗論派にまかせれば、殿様はよくて奥州あたりの五万石程度へのお国替え、悪くすりゃ切腹じゃろうが。

竹蔵 うちの店のものが上方通いの船頭衆から聞いたそうです。幕府の命令で広島にきとる諸藩のお大名たちは、どこもお台所は火の車……その上、長州征伐のために多額の軍用金をとりたてていることへの反感が高まり、一揆さえ起きかけとる。すっかり困りきって、内心では長州征伐どころの話ではないと。

真吉たち、顔を見合わせ喜色を浮かべる。

甚平 日本中で百姓が頑張るとるんじゃ。

晋作 そのとおり！ 幕軍が広島から動かないのはそういうことだ。京都の戦で長州軍は薩摩や会津に負けたが、しかし今度、わが長州の本拠に攻め込んだら、長州藩内が領民あげて一挙に結束、長期戦は避けられん。それでは各藩の方が持たん。だからこそだ……幕府は俗論一派を手先に使い、長州人同士を争わせておる。だからこそ、藩内部の俗論派を一掃すれば、幕府は手出しが出来なくなる。

隊士たち、互いに頷き合う。

晋作 （真吉に）どうじゃ、そうは思わぬか。

真吉 はい、自分もそうじゃが、われらは徳川を倒して四民平等の新しい世の中をつくるためには、命も惜しくはないんであります。そのために、村のものから送られております。（毅然と）幕府に降参しようっちゅうような俗論政府と妥協するなど、絶対で きんことじゃと、みな言うております！（甚平たちに）のう。

茂松 奇兵隊は侍の部隊に負けるわけがないと思って志願しました。いっそう領民に信頼されるようにならにゃいけんと、新しく奇兵隊の隊則を定めちゃった。ねえ山県隊長！

山県 ……。（腕組みをしたまま、目を閉じて無言）

真吉 自分は、あの奇兵隊の隊則を読んだ途端、身体中が熱うなって、涙が出たです！（懐から『諭示』を出して）……一つ、農事のさまたげ、少しもいたすまじく、みだりに農家に立ち寄るべからず。牛（うし）馬（うま）など、小道に出会い候わば、こちらの側が道へりによけ、速やかに通行いたさせ申すべく、田畑にはたとい植付はこれなき候ところにも、踏み荒らし申すまじく

候。

晋作 うんッ……。 (腕組みをして目を閉じる)

甚平 一つ……強き百万の兵といえども恐れずつ、弱き民は、一人といえども恐れ候こと！

真吉 こういう性根で領民と共に戦うたら、幕軍が十万おろうと二十万おろうと、勝てん相手はどこにもありゃせん。

甚平 山県隊長！

山県 しかし……まあとにかく、赤根総督が帰るのを待たせてもらいます。(筑前と共に席を立つ)

晋作 まだわからぬか。そんなら俺一人でも、萩の城に攻め込んでみせるわ。

山県 (筑前を制し、真吉たちへ、つとめて穏やかに) お主ら、番所の検問当番じゃろうが。持ち場へ戻れ。

筑前 隊長の、命令じゃっ。

山県、筑前、退場する。真吉たち、晋作に頭を下げ、意気揚々と去ってゆく。森田がのっそりと立ち上がり、無言で出ていく。入れかわりに弥市がくる。

弥市 さきほどから、話は聞いておりました。

晋作 よし。じゃったら、いまからやるぞ。話して動かぬなら、行動によって動かす。

弥市 はい。

晋作 ご苦労だが、諸隊へ走って、伝えてくれ。

弥市、「はっ」と声に出して座りなおし、命令を待つ。

晋作 いまから出撃する。子(ね)の刻までに功山寺の陣所へ集結せよ。

弥市 功山寺、功山寺の陣所へ、子の刻までにでありますか。

晋作 そうだ。

弥市 はいっ。

晋作 伊藤と石川には、話がついとる。まずこの二人に報せて、あとはつぎつぎ、各隊の隊長に伝えろ。遊撃隊は月溪院。御楯隊は修禪寺、奇兵隊は覚苑寺。

弥市 心得ております！(行きかけて立ち止まり、振り返って) 子の刻、功山寺の陣所へ。

弥市、小走りに去る。庭先の闇に小雪がちらつき始めている。

晋作 （厳しい目を庭先の闇に向ける）ほう、降りはじめたの、清めの雪か。

折からの月光に、晋作の姿がくっきり浮かび上がったところで——溶暗。

第四場

翌日、子の刻（午前零時）。下関長府、白一色の功山寺境内。弥市、正一郎を案内して、山門よりくる。同時に本堂の方から、晋作登場。紺糸緘の小具足を着け、桃実型の兜を頸（くび）にかけている。

晋作 （弥市に）伊藤たちはまだか。（正一郎を認め）おお。（歩み寄る）

正一郎 いま聞けば、参加者はわずか、八〇名たらずだそうですが。

晋作 おまかせあれ。われに勝算ありです。

正一郎 ですが、萩の御城下にはあなた、俗論党二千余の隊士がこちらの攻撃に備えて、待機しているそうではないですか。

晋作 なぁに、馬関の会所を襲うには、それで十分。それで米倉と、銭箱を押さえます。ここを攻撃軍の根城にして、新たに隊士を募るので。

正一郎 そして？

晋作 七〇人あまりのわれらの行動は、まずは、領内五〇万の民衆に火をつけ、諸隊を動かすため。なに、必ずや動き始めます。それが奇兵隊です。それからが勝負。

正一郎 （肝を決める。さらりと）なるほど。わたくしも、やってみましょう。馬関の商人、近郷の庄屋衆にも呼びかけて……はい。

晋作 頼みます！

このとき突然、弥市が「おう！」と叫ぶ。竹蔵、真吉、茂松、甚平らが駆け込んでくる。

弥市 待ったぞつ。

真吉 山県さんが、陣屋の門を閉めてしまいなすってな。

甚平 仕方がねえけえ、おらたちや、裏へ回って、

茂松 裏の堀を乗り越えて、逃げてきたんじゃ。

茂松たち、声を合わせて、大笑い。

晋作 よし出発だ。諸君、俺に命を預けてくれ。——功山寺におられる五卿殿に申し上げる。ただいまより長州男児の肝っ玉をお目にかける。

「どけどけ」といわぬばかりに押しかけて、森田登場。

森田 高杉……逆賊になる気か。無茶はよせ。無謀だつ。

晋作 まだわからんか。

森田 野山獄の苦しみを忘れたか。

晋作 苦しみを恐れて何ができるか。

弥市 総督おすすみください。

晋作 (森田の方へ向き直り) わしが死んだら墓の前に芸妓を集めて、三味線など鳴らして賑やかに送ってくれ。わしの墓には、奇兵隊開關総督高杉晋作と刻んでくれ。(弥市たちに向かって) さあ、出陣だつ。

隊士たちが「おう」とこたえ、武器を構えたところで、寒風が吹きはじめる。弥市が一点凝視、朗々と前原一誠の詩を吟ずる。

弥市 軍謀終夜青澄ヲ剪(き)ル 暁ニ閃(きらめ)ク 旌旗(しょうき) 気益(ますます) 増ス 凜冽(りんれつ) 寒風面(めん) 将(まさ)ニ裂ケントス 馬蹄踏破ス 満街ノ氷——。

勇壮な音楽と共に、暗転。

第五場

同日、寅の刻(午前四時頃)。下関、新地奉行所。甚平の手引きで隊士たちが集結し、突撃の陣形をとる。晋作の号令で喚声をあげ、隊士たち奉行所へ突入する。喚声静まり、音楽が続くなか、弥市、真吉、甚平、茂松の四名が、舞台前方に進み出る。

弥市 (客席に向かって) 功山寺に兵を挙げた高杉さんが、われら有志七〇余名をひきいて進発したのが真夜中の子の刻すぎ。まだ明けやらぬ暁七つには、下関新地の奉行所を早くも占拠してその日のうちに馬関を制圧。

真吉 高杉さんは、ただちに人民安堵、農商を安んずる旨の檄を飛ばした。そして兵を募ったところ、たちまち百二〇余名が集まった。息つく間もなく三田尻へ走って、海軍局を急襲。

甚平 はじめ高杉さんが、俺が行って三田尻の軍艦をとってくる。俺と死ぬやつはおらぬかといいなさるけえ、わしゃ真っ先に名乗

り出た。

茂松 高杉さんは名乗り出た者のなかから一八名を選んで、三隊に分け、一艘六人ずつ小舟を漕いで、軍艦に乗りつけた。
弥市 今の政権は俗論の手中にある。このままでは長州は滅びる。われら、どこまでもこれが回復をはからねばならぬ。足下（そっか）ら御同意ならば即刻、錨をあげて馬関へおいで下さい。不同意ならばお互い、ここで刺しちがえようではないか！……高杉さんが目尻をあげて激しく詰め寄ると、
真吉 その勢いに驚いて、海へ飛び込んで、
甚平 逃げたやつがおる。
茂松 先頭に立つのは、いつも高杉さん。
甚平 みんなの意気はあがった！

極くちかくで、大砲の発射音。暗転。再び戦場。夜は明けている。晋作、額の汗をぬぐってひと息。茂松、甚平が同行。そこに、弥市が駆け寄ってくる。

弥市 高杉さん……俗論政府が、高杉さん追討の命令を出したそうであります。
晋作 ほう、毛利家譜代の臣、高杉晋作、ついに逆賊となったか……。
茂松 殿さまは、俗論派がいうけえ、そうせいというちよるんじゃ。
甚平 こっらが勝ったら、またそうせいというに決まっちよる。
茂松 いまどき追討令を出しても、手遅れじゃ！

茂松たち笑い声。竹蔵が晋作の名を呼びながらくる。

竹蔵 軍用金……御安心ください。湯田の大庄屋、吉富藤兵衛さま——当座の御用にと、差し当たり二百両。馬関の、入江和作さま、三千両。
晋作 うんっ。
竹蔵 吉富さまは、近郷の領民に呼びかけて自ら兵を起こし、山口、小郡の奉行所を襲撃する所存であると。（隊士たち、歓声）林勇蔵さまはじめ小郡の庄屋、村役の衆二八名は、死を決して誓いの酒を酌み交わし、われら反乱軍の支援を申し合わせたそうあります。
晋作 ほう。
竹蔵 それから、下郷の庄屋、秋本新蔵さまより伝言であります。正義派のお方がお倒れになっては長州はそれきり。もし万一——皆様方でやれない場合は、新蔵の手をもって百姓一揆を起こし、及ばずながら御助成致す所存とのこと。反乱諸隊に人馬を用立てたり、米や金銀を、貸し与えたりすること一切、相成らんと俗論政府の布告などなんのその、皆様命をかけておられます。

隊士たち、歓声をあげたところに、正一郎が駆けつける。

正一郎 高杉さん、先刻、手前どもに届いた早飛脚でございますが……。

晋作 (振り返って) はい。

正一郎 幕府征長軍総督・徳川慶勝……五卿の九州移しの約束が出来たといって、兵を解いて撤退せよと、全軍に命じたようであります。

晋作 ほう。

正一郎 反乱のことは長州藩の内部問題であり、征長軍の関知するところではない——というのが、総督参謀・西郷隆盛の話であったとか。

晋作 腹芸の男、西郷か。面白いことになりよるのう。

茂松 わしらが日本を動かしよるんじゃ。

真吉が、高杉の名を呼びながらくる。

真吉 高杉さん！ ……長府に居座った連中も、ついに腰をあげました。

晋作 なに？

真吉 奇兵隊、膺懲隊、御楯隊、諸隊みな一斉に、萩へ向かって進撃を開始したそうであります。土佐の中岡さんたち、諸国の浪士隊も。

晋作 そうか、やりよったか。

このとき関(とき)の声。叫喚。隊士たち、再び武器を手に乱闘の真っ只中へ斬って入ったところで、舞台溶暗。やがて、一条の光に照らされ、山県と森田が登場。

山県 馬が飛ばば、風が走るとはこのこと。(立ち止まり客席に向かって)高杉、馬関占拠の報せを受けて、われらも決起した。

森田 (歩きながら)激昂した隊士たちから、突き上げられたと言うてもよかろう。

馬の嘶(いなな)き。蹄(ひずめ)の音。関の声。

山県 われらは兵を起こすと、絵堂に駐屯する政府軍を攻撃。さらに大田へと兵を進めた。だが——絵堂大田は、思いもよらぬ激戦となった。

森田 元治二年一月一四日、俗論軍が猛烈な反撃を開始した。まず膺懲隊一〇〇名が、長登で十倍近い俗論軍と遭遇。かなわぬとみ

て退却し、あとからきた八幡隊、御楯隊と合流して、呑水峠（のみずのたお）まで退き、防戦の体制をとった。

山県 早朝より強風すさぶ氷雨のなかを、諸隊をはるかに上回る俗論軍が南下してきた。氷雨が砲門をぬらし、兵士らはみな、石灰岩地特有のぬかるみに足をとられ、泥だらけになって苦戦した。だがやがて、下関をたった高杉さんが、新鋭装備の遊撃隊を率いてわれらに合流！

真吉を先頭に、茂松、甚平、竹蔵が飛び出してくる。

真吉 （甚平たちに）いいかつ、どねえなことがあると、田畑を荒らしちゃつまらんぞ。たとえ俗軍じゃろうと、狩り出された農兵には手を出すな。怪我をしておれば手当てをして、家に送りかえしてやるんじゃ。わかったかつ。

茂松 おーっ。

真吉 よーし、行くぞ！

年老いた百姓が駆け出してくる。

年寄り お前方ッ。

茂松 おお、どうか、なさったか？

年寄り お気をつけなされ！ むこうの竹やぶにゃ、俗軍のお武家集が潜んじよります。ほれ、あのお地蔵さまの手前に裏道がありましよう。あっちの方から攻めていきなさがよかろう！

真吉 わかった。それより、まもなくこの辺りは激戦になる。なるべく早う、避難しなされ！

このとき半鐘が連打されはじめる。

甚平 （振り返って）あーっ、見てみい。

年寄り 俗軍が放った火で、油屋の店が燃え始めたっ。（駆け出そうとする）

茂松 （引き止めて）お待ちなされ、ここはわしらに！

竹蔵 真吉っあん、あの火を消すのが先ぞっ

真吉たちが走り出したところで、溶暗。ふたたび明るくなると、晋作率いる一隊が登場する。弥市が駆けつける。

弥市 高杉さん！ 林勇蔵さま、秋本新蔵さまをはじめとする庄屋同盟の呼びかけにより、山口、防府、宇部、船木など、近郷の農民が、炊出しのにぎりめしを積んで、ただいまこちらに向かっています！ 五〇〇人が農兵、一二〇〇人が人夫です。

「えーい、のけのけ、邪魔だ邪魔だっ！」の声と一緒に、米俵を積んだ荷車を曳いて、お常、お芳らが威勢よく登場。反対側より、槍をかついだ茂松、走り出る。

茂松 (大手をひろげ) 待て待て……なんじゃ、それは。

お芳 米じゃ、米じゃ。

お常 村中で寄せ集めた米じゃ。腹が減ってはお前方、戦になるまいが。

茂松 それはかたじけない。代金はあとで必ずとどけますけえの。

弥市 (素早く筆を走らせて) これが証文じゃ。戦が終わったら、かならず返しますけえ。

お常 なにを水くさいこと言うちよるかッ。

真吉 いいや！ 百姓衆がどねえな苦勞をしてこれだけの米を集めたか……わしらにわからんとでも思うちよるかッ。

お常 そうか……それでこそ、高杉さまの奇兵隊じゃ！

お芳 陣所はどこじゃ。

茂松 陣所？ ああ、(指差して) あの山かげのお宮さんじゃ。

お芳 よし、わかった。(掛け声) そりゃっ。

お常たちが荷車を曳いて駆け去るのを、隊士たちが見送る。手を振りながら笑いながらも、感極まる真吉、茂松、甚平たち。音楽高まるなか、舞台は変わって寒風吹きすさぶ真夜中の戦場になる。雪が降りしきるなか、俗兵数名、茂松ら奇兵隊士に追われて敗走して来る。俗兵の一人が踏み止まり、真吉と斬り合いになる。その横から別の俗兵が真吉を突き刺し、つづいて茂松めがけて突きかかる。竹蔵、甚平の両名が加勢に駆けつけ、俗兵の一人を追撃する。茂松は槍ふるって勇敢に応戦する。俗兵、姿勢を崩した茂松めがけ「この土百姓っ」と叫んで突き刺そうとする。倒れていた真吉が負傷にめげず立ち上がり、茂松を刺そうとしていた俗兵を「この米食い虫めがっ」と刀で一突き。俗兵たち敵せずと見て四散。舞台はいったん暗くなる。力強い音楽に変わって明るくなると、雪は止んでいる。弥市が、森田とともに駆けて来る。弥市、あたりを見回し、「総督！」「高杉さんっ」と繰り返し呼ばれる。晋作、登場。

弥市 勝ちました！……俗論政府が、ついに、甲を脱ぎましたっ！

晋作 なに、甲を脱ぎよったと？

森田 殿の御命令だっ。殿の御命令でいましたが、軍使が伊佐の本陣へ矢止めの相談に来よったそうじゃ。

期せずして、取り巻いた味方勢から、歓声があがる。

晋作 停戦の相談にかっ。

森田 そうじゃ。民心が離れてお手上げじゃと。
真吉 それで？ その条件は。
弥市 棕梨藤太、中川宇右衛門、三宅忠蔵、村岡伊右衛門らを萩藩政府の要職からはずし、謹慎、申しつけるとのことであります。
森田 そして、いずれは、これよ。（切腹の仕種）
甚平 わしら、とうとう、ひっくり返したぞ！

一同、「おー！」と拳を高く空へ突き上げる。

晋作 （会心の笑み）そうか……長州の正義は回復し、藩論は統一。これで幕府軍とはいつでも戦える体制が出来た。日本の夜明けが見えてきたぞ！

静かな音楽が低く流れ、遥かな山脈の稜線が茜色に染まり始める。

晋作 （隊士たちを振りかえって、静かに）諸君、これは死ぬことも恐れずよく戦うた諸君らの奮闘と、何よりも五〇万領民の力だ。（一人一人の顔をみつめて、微笑を浮かべ）晋作、心より礼をいう。ご苦勞であったッ！

隊士たち叫びたい感動を押さえ、互いの肩をたたいて労をねぎらいあう。晋作と隊士たち、朝焼けのなかで美しいシルエットとなり、解説者が浮かび上がる。

解説 慶応元年二月、長州藩はついに藩論を統一し、倒幕のための体制を確立——。高杉晋作による功山寺の決起は、まさに明治維新革命を決定づける最大の転換点となったのです。

お常、お芳らがきて隊士たちと労をねぎらいあう。静かだが前進感のある力強い音楽が流れはじめる。

解説 その後、フランスの支援を当てにした幕府の第二次長州征伐軍との四境戦争において、高杉は軍事戦略家としての卓抜した力を発揮します。十数万の幕府征長軍をわずか四千あまりの長州軍が打ち破っていったのです。長州軍のこの力は、兵士の戦闘意欲が高いこと、何よりも領民が共に戦ったことにありました。また長州の戦いと呼応して大坂、江戸をはじめ日本中で徳川時代最大規模の一揆や打ち壊しが起き、長州に派遣されていた各藩の足元を揺さぶっていたのです。

そして、薩長同盟が成立し、鳥羽伏見のたたかいから戊辰戦争をやりぬいて、ついに徳川幕府を武力で打倒。明治新政府による徳川幕藩体制の解体がおこなわれ、その領地の没収、士農工商の身分制度などを廃止し、新しい近代統一国家をつくりだしました。まさに社会革命です。そしてアジアで唯一、欧米列強の侵略を阻止し、民族の独立を守り抜いたのです。

これを成し遂げた原動力は、まぎれもなく農民、町人という人民であります。ところが明治政府が成立するや、新官僚となった

下級武士は奇兵隊及び民百姓を裏切ることとなります。にもかかわらず、明治維新を成し遂げた力こそ、日本民族の誇るべき歴史でなくて、なんでありましょう。

奇兵隊総監旗を背に立つ晋作を、照明が一際鮮やかに染め、一同が振り返って注目する。

解説 高杉晋作は、第二次長州征伐軍との戦役の勝利のなか、ついに病に倒れます。（下関市新地、高杉終焉の地のスライドが映し出される）明治維新成就の前年である慶応三年四月一四日、維新革命の基本的な条件が出来たことを見届けて、永遠の眠りにつくことになりました。（東行庵にある晋作の墓のスライド）——高杉晋作、享年二九歳、満二七歳八ヶ月。奇兵隊本陣があった下関市吉田の清水山、東行庵に眠っております。

それでは最後に、高杉晋作の人柄を偲んで幕を閉じることにいたしましょう。

日和山の晋作像、功山寺山門、赤間神宮境内にある白石正一郎の墓、桜山招魂場の奇兵隊士の霊標、下関市吉田の奇兵隊士像など、高杉ゆかりのスライドが、つぎつぎと投射されてゆく。晋作を、ライトが塑像のように照らします。同時に白石正一郎、真吉や茂松などの奇兵隊士やお常、お芳たちなども。

解説 「動けば雷電の如く、発すれば風雨の如し、衆目駭然（かいぜん）、あえて正視するなし」——これは後年、伊藤博文が記した高杉碑文の書き出しです。

竹蔵 功山寺決起をした十数日後の元治元年暮れの句——「うぬ惚れで世は済みにけり年の晩」「うぬ惚れで世は済みにけり年の晩」。

正一郎 慶応元年、維新革命運動の戦死者を弔う桜山招魂場建立にあたって詠んだ歌——「弔わる人に入るべき身なりしに弔う人となるぞ恥ずかし。弔わる人に入るべき身なりしに弔う人となるぞ恥ずかし」

解説 そして辞世の句。下の句は野村望東尼——「面白きこともなき世を面白く」

お常 すみなすものは、

お芳 心なりけり。

晋作 「面白きこともなき世を面白く」

真吉・甚平・茂松 すみなすものは、心なりけり。

音楽が高まるなかで、ゆっくりと、幕——